

人吉市まちなかグランドデザイン 推進アクションプラン[素案]

資料1-2

1

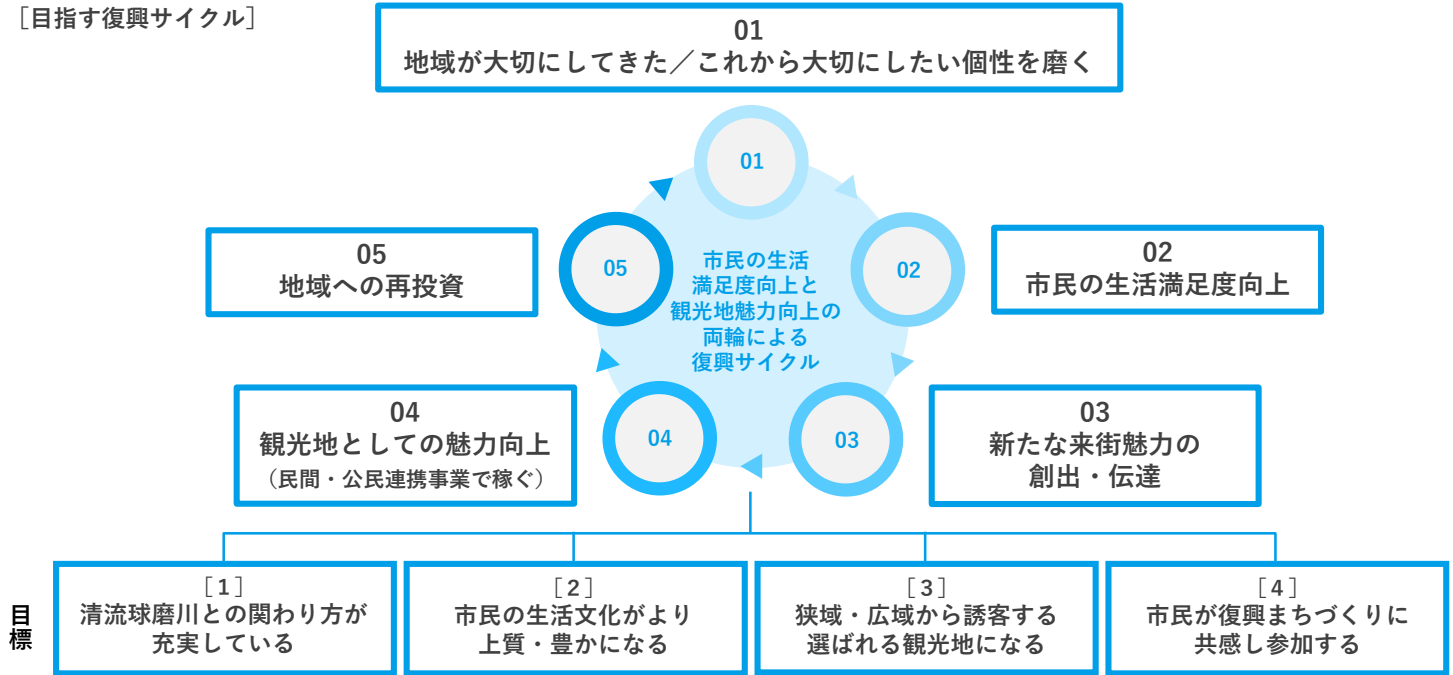
概要版

本アクションプラン素案は、グランドデザインをベースに市民・事業者のヒアリングと専門家の意見を重ね合わせ、それを元にデザイン会議で議論した内容を推進会議に提案し、承認をいただいたものである。

アクションプランが目指すもの：市民の生活満足度向上と観光地魅力向上のサイクルを生み出す

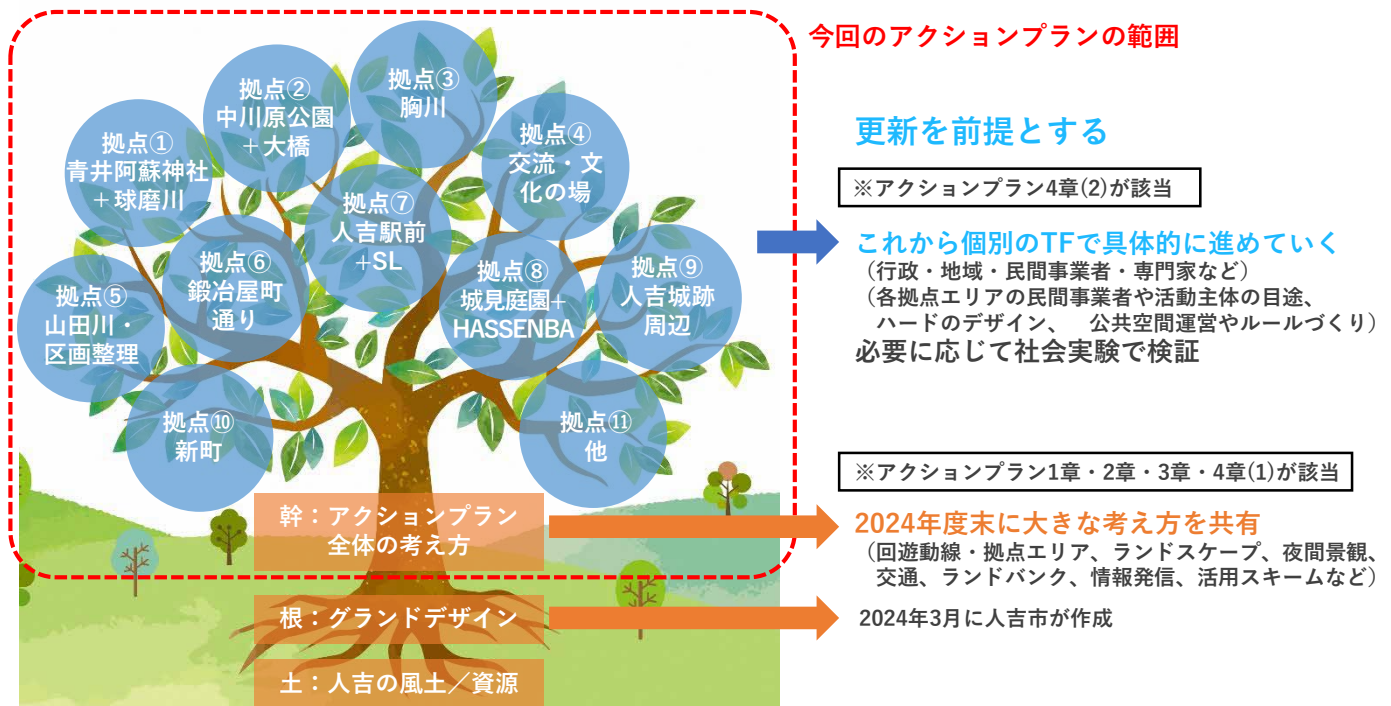
アクションプランが目指すのは、第一に市民の生活満足度向上である。地域が大切にしてきた／これから大切にしたい個性を磨くことで、日々の暮らしがより豊かになる。その豊かな暮らしは来街者にとって魅力的に映り、人吉に行ってみようという動機につながる。その魅力が広く伝わることで、観光地としても魅力が高まり、何度でも通いたくなるまちとなる。それによりまちで稼ぎ、地域に再投資することで、個性がより磨かれていく。市民の生活満足度向上と観光地魅力向上の両輪による復興サイクルを目指していく。

[目指す復興サイクル]



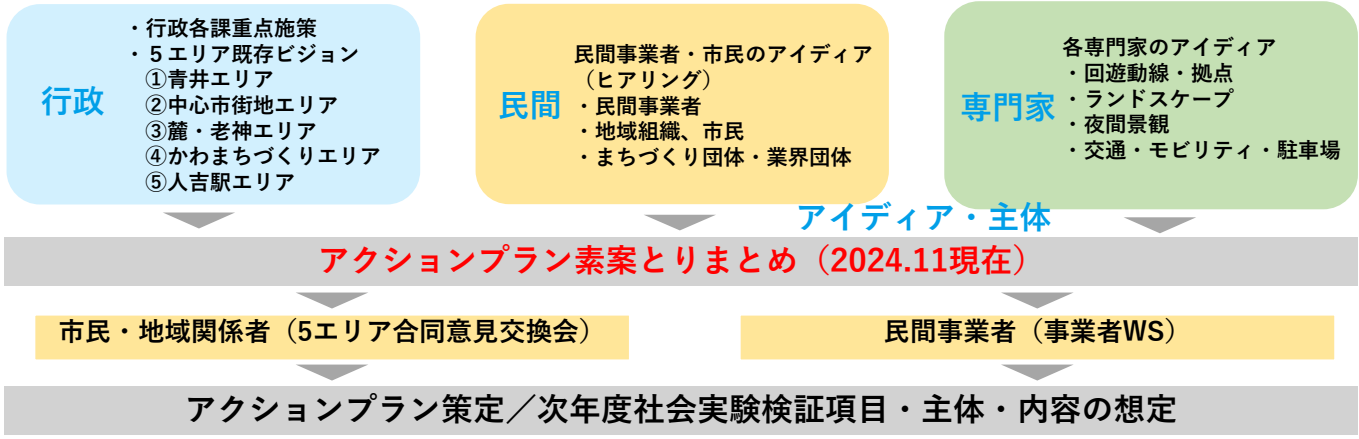
アクションプランの位置付け：更新前提のプラン

「アクションプラン素案」や「アクションプラン」は更新を前提とする。なぜなら、行政のみで実現できる計画ではなく、将来事業や運営を担う主体となる民間事業者・市民が大切であり、また行政の財源によっても実現性は変わる。そのため、アクションプランの内容は更新が前提で、実現が保証されたものではなく、また、現時点で掲載されていない内容・エリア・テーマ等についても主体や事業・活動の内容が具体化してくれば追加していくものとする。

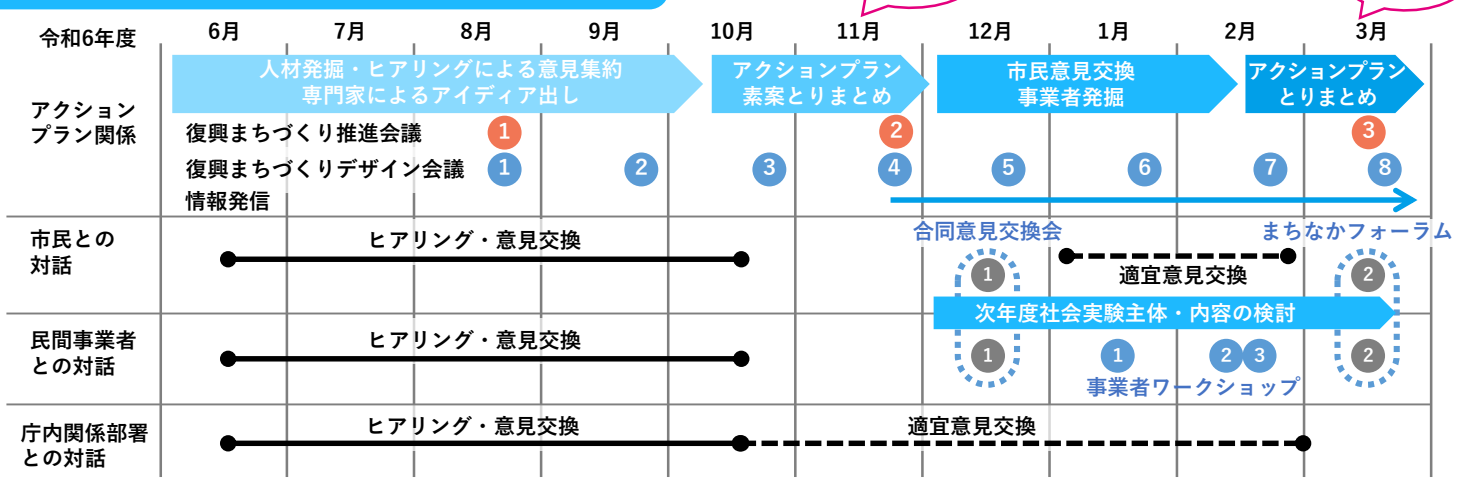


アクションプランのつくり方：民間事業者・市民、専門家、行政のアイデアを重ね合わせる

まず、まちなかグランドデザインに描かれている行政のビジョンに、民間事業者・市民、専門家のアイデアや想いを重ね合わせ令和6年11月にアクションプラン素案をとりまとめる。5エリア全体での市民・地域関係者や協議会メンバーとの意見交換、今後事業参画を検討している民間事業者とのワークショップを実施し、それぞれのアイデアを重ね合わせることで、令和7年3月にアクションプランをとりまとめる。

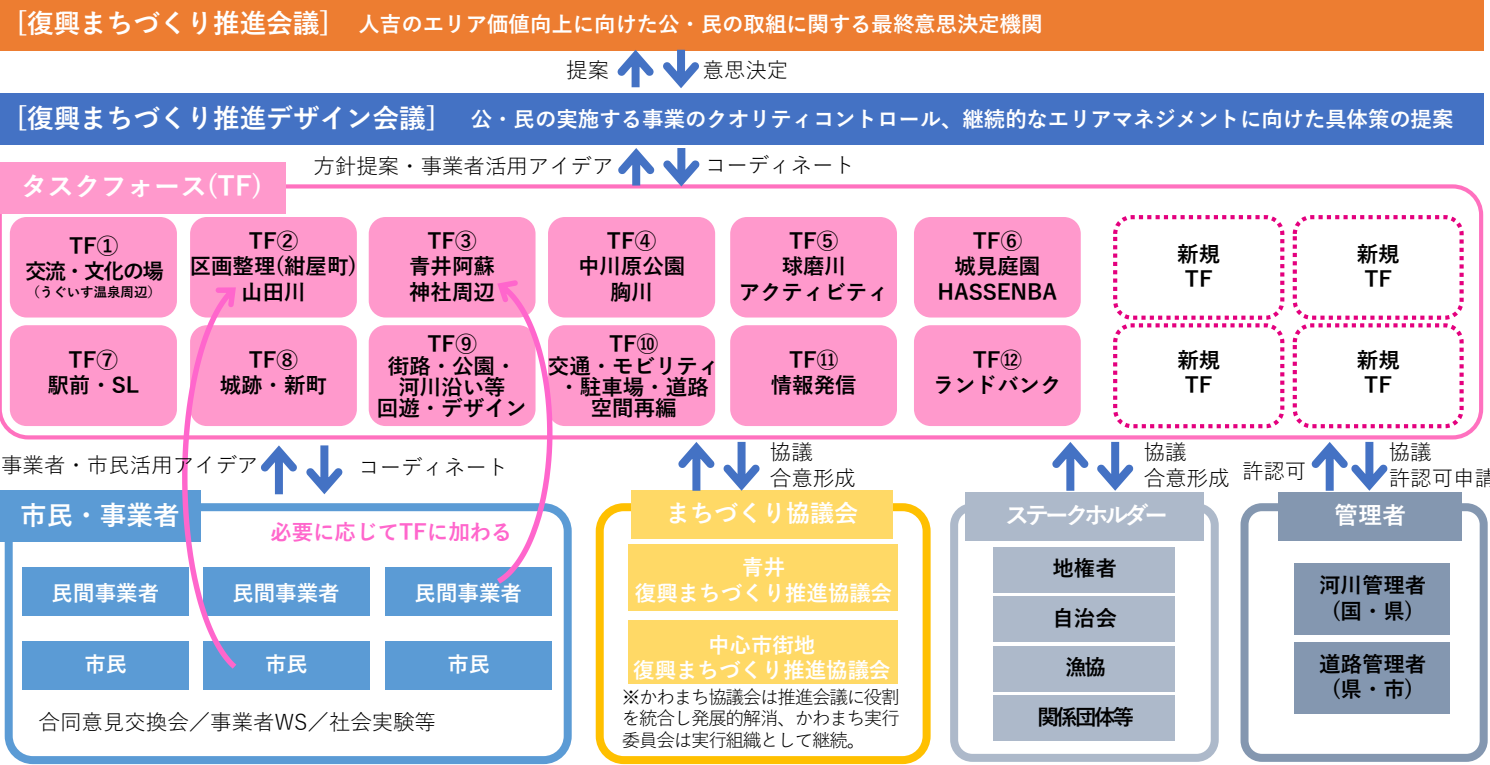


アクションプラン策定に向けたスケジュール



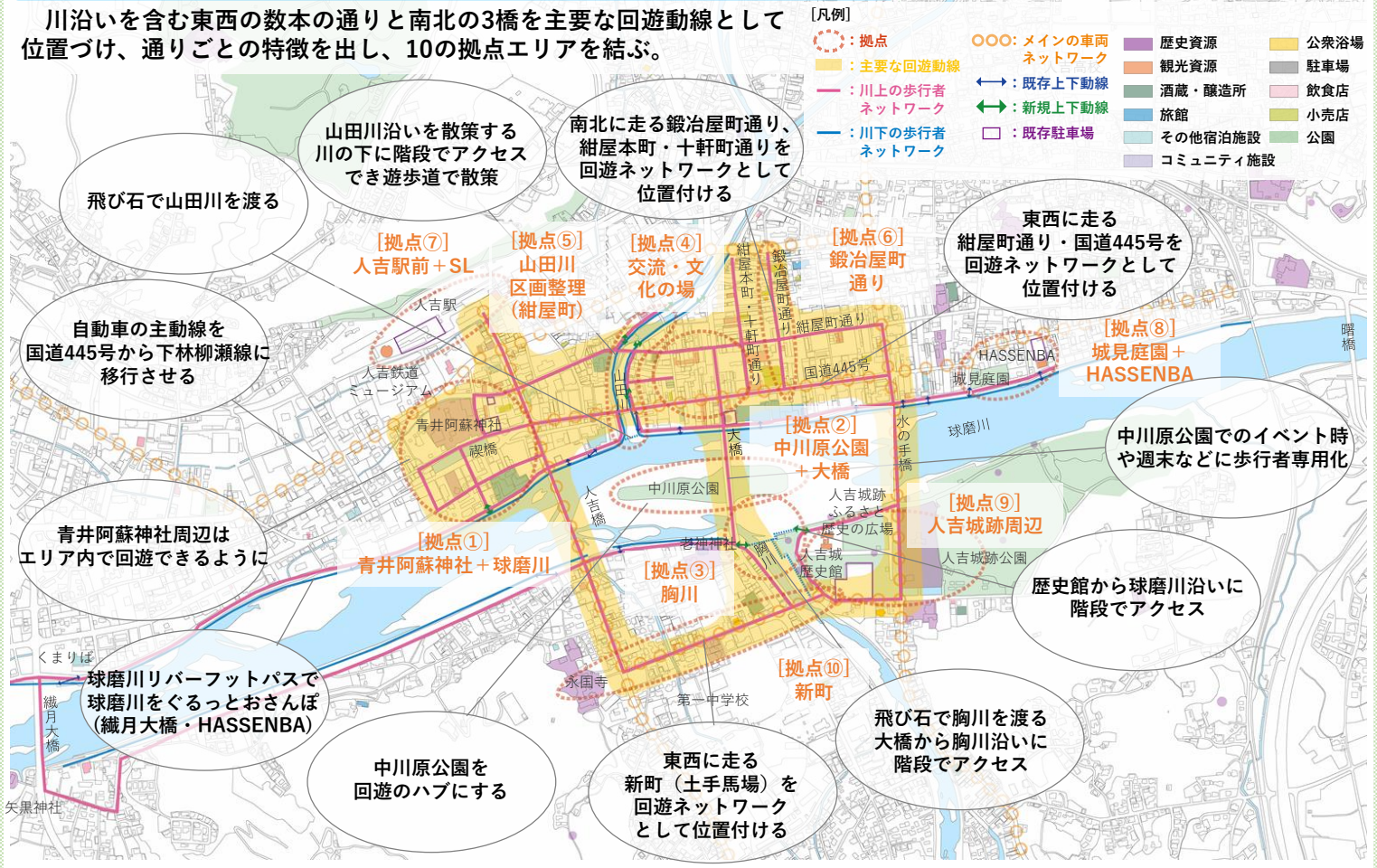
推進体制：デザイン会議・タスクフォースで検討し、推進会議で意思決定

民間事業者・専門家・行政等によるデザイン会議が、各拠点エリアを中心に具体的な将来像や事業化検討等を行うタスクフォースと連携して具体策を検討し、意思決定組織である推進会議へ提案を行う体制である。



回遊動線と10の拠点エリア：主要な通りを回遊動線に位置づける

川沿いを含む東西の数本の通りと南北の3橋を主要な回遊動線として位置づけ、通りごとの特徴を出し、10の拠点エリアを結ぶ。

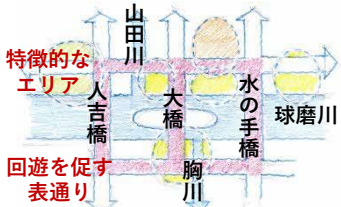


エリア全体のランドスケープの考え方

人吉球磨の観光の起点となる人吉市街地は、九州縦貫道の人吉IC・人吉球磨スマートICや肥薩線・くま川鉄道によって広域交通ネットワークを形成し、球磨川を中心とした水文化の拠点となっている。市内中心部は3つの橋が兩岸を結び、2つの支川(山田川・胸川)と中州(中川原公園)が作る地形によって、特徴的な景観や水辺の使い方が生まれている。これらを眺め、巡る視点によって、人吉らしい風景を活かしたランドスケープの形成を目指す。

1 市街地の主要動線と各エリアの視点

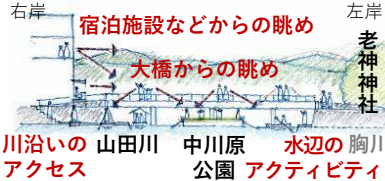
球磨川を中心とした水の手橋から人吉橋までを取り囲む回遊を促す表通りと特徴的なエリアや支川がつながることで、まちなか回遊を促す。



2 川沿いの視点

水の手橋から人吉橋の区間

右岸の宿泊施設や店舗から中川原公園や水辺のアクティビティを望み、活動的な球磨川を感じる区間である。山田川や胸川も含めた川沿いの豊かな利活用を促すエリアを目指す。



水の手橋より上流の区間

左岸の人吉城跡の石垣や城跡の森を望み、人吉の歴史や球磨川の静けさを感じる区間である。右岸の城見庭園やHASSENBAを主要な視点場とし、落ち着いた雰囲気エリアを目指す。

人吉橋より下流の区間

右岸の青井阿蘇神社の森が日常の風景の中で眺められる区間である。川沿いには新たな船着場を設けるなど、青井阿蘇神社と球磨川との結びつきが感じられるエリアを目指す。

4 街なかの森・未利用地の視点

街なかの森の連続

神社や寺院などの既存の森や樹木を緑の拠点とし、新たに整備する公園や通りへの緑の配置や未利用地を含む民有地への植栽を促すことで街なかの森を連続させていく。

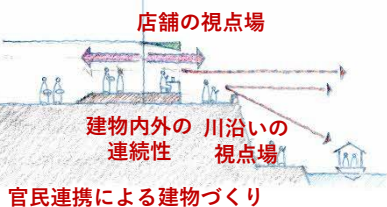
未利用地の景観づくり

行政や民間の未利用地をランドバンクの仕組みをすることで暫定的活用につなげる。

3 川通りの視点(かわみち・かわばた・かわまち)

川に開かれた街並みの創出

川沿いの民有地とも連携し、球磨川の風景を活かした宿泊施設や店舗づくりを促す。水害対策としてのピロティ構造は川への視線の抜けや動線としても有効な作り方である。



街と川との動線強化とアクセスや視点場

各エリアの拠点などから川への動線を強化し、川へのアクセスや視点場を設けることで、人吉らしい街と川とのつながりや関りを創出する。

川通りでのにぎわいの創出

川通りでの店舗などの営みは人吉らしい暮らしのひとつである。飲食などもしやすい道路空間づくりを行い、官民連携で川沿いでのにぎわいの創出を目指す。

5 通りの個性の視点

国道445号: 青井阿蘇神社から宿泊街、HASSENBAを結ぶ目抜き通りとして、各々の街並みを尊重し、舗装や照明等の一貫した基盤整備を沿道とも連携する。

紺屋町通り: 飲食街の通りとして、歩行者を優先し、夜間の歩きやすさも確保する。

鍛冶屋町通り: 歴史のある通りとして、趣のある建物の作りを保全・展開し、滞留ベンチや小広場を活かす。

紺屋本町・十軒町通り: 新旧の飲食店舗が並ぶ通りとして、観光客も訪れやすい基盤整備を沿道とも連携する。

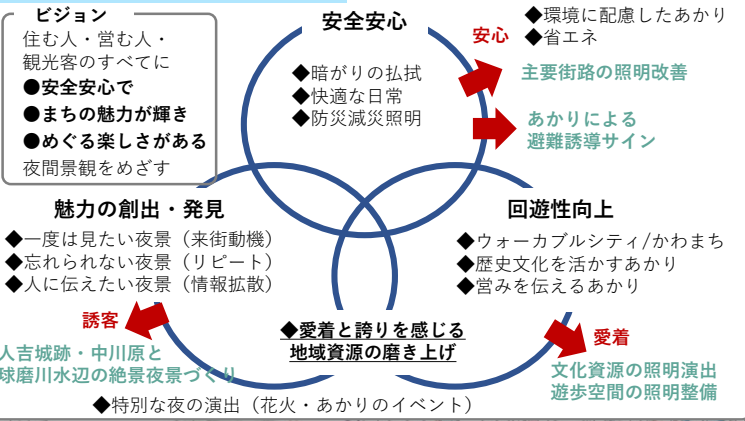
土手馬場(新町): 人吉城跡と永国寺を結ぶ歴史のある通りとして、武家屋敷や酒造等の沿道とも連携する。

6 素材の視点

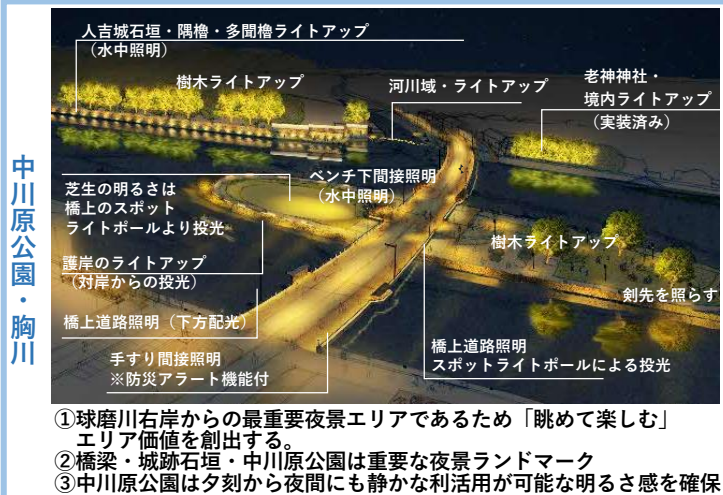
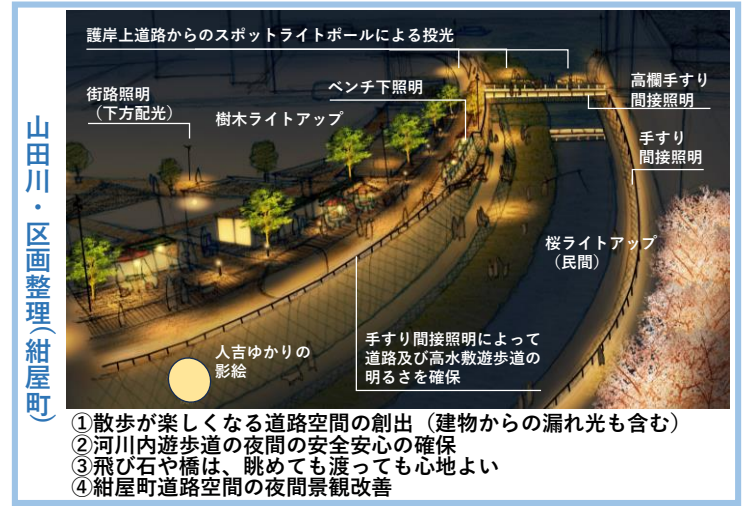
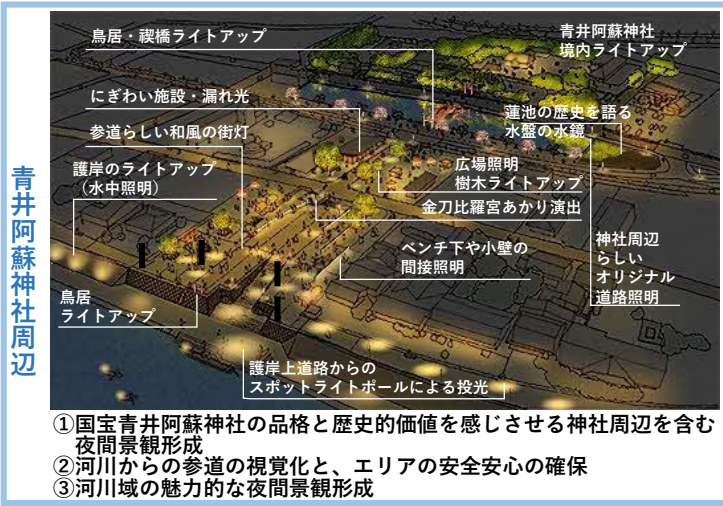
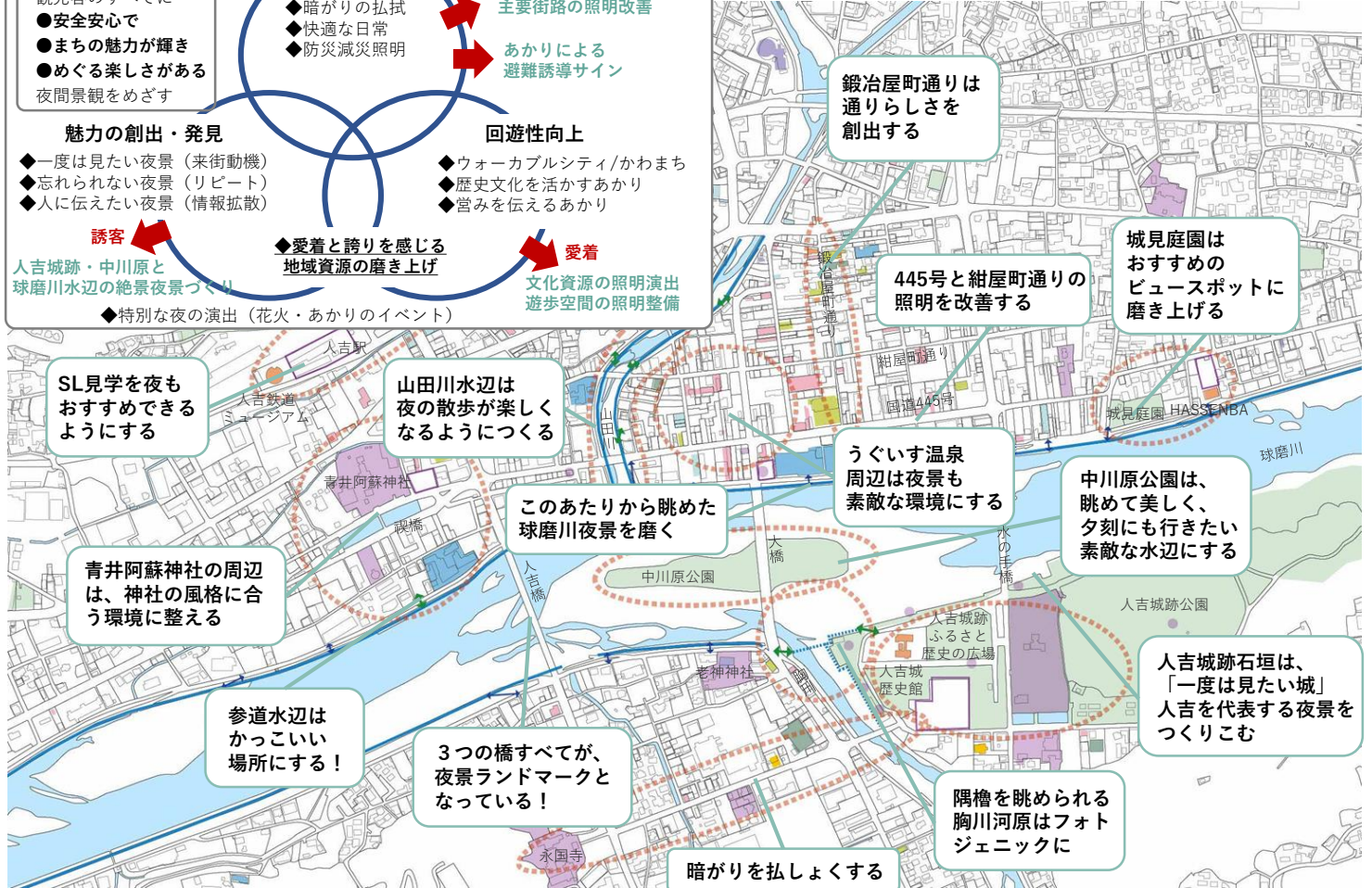
川城である人吉城跡の石垣を尊重し、球磨川や山田川、中川原公園の河川整備では石積み護岸を用いることで人吉や球磨川の歴史や景観、環境に配慮した素材とする。青井阿蘇神社周辺では、神社の趣を感じられる石畳を公共用地でも使っていく。

エリア全体の夜間景観の考え方

「球磨川夜景」形成の骨子



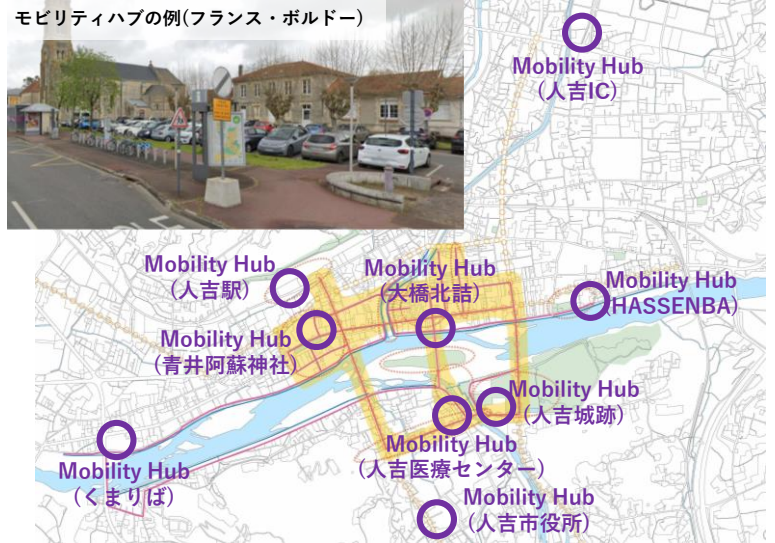
重点各エリアの照明整備の方向性



【目指す方向性】 公共交通を強化・補完し、まちなか各所のアクティビティとモビリティの統合的サービスを図る
 ～市民生活の利便性と来街者の回遊性を高める「MaaS」(Mobility as a Service)の展開～

- ①各交通モード間の乗り換えをスムーズに行うことができる「モビリティ・ハブ」を要所に整備し、自分のペースでゆっくりとまちなかを回遊・体感できる交通インフラを形成する。
- ②自動運転やAI等の新技術を積極的に取り入れ、時代に合った交通システムへとアップデートする。
- ③来街者用の駐車場については、将来の需要を想定し、新規確保を検討する。
- ④シェアサイクルについては、既存のリソースの有効活用を前提としながら、公民連携による持続可能な運営方式を検討する。
- ⑤まちなかの回遊動線を充実するため、道路舗装の美化や歩行空間・自転車通行空間の整備、シェアドスペース等の採用によるクルマの速度低減などを図る。

モビリティハブの例(フランス・ボルドー)

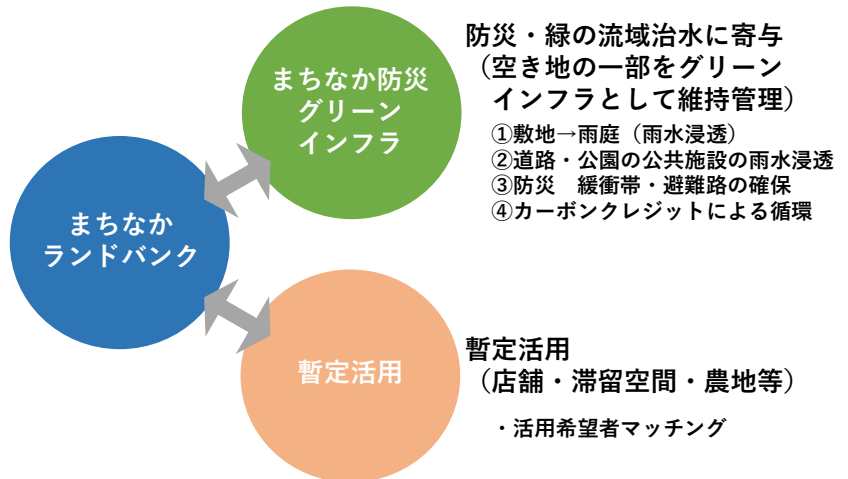


人吉まちなかランドバンク

「人口減少への対応」と「エリア魅力向上」を両立する未利用地を「ストック→フロー化」、エリア魅力に活用する仕組み

昨今の全国的な災害の後、人口減の流れもあり以前のようにすべての土地で再建が行われず、空き地として残るケースが多くみられる。以前のように密な状況を求めるのではなく、疎な状況でも周辺環境を悪化させない、豊かな使われ方に変えていく工夫が求められる。雑草が生い茂り放置された状況ではなく、暫定的に子どもの遊び場、グリーンを配した駐車場、期間限定店舗などの市民活用につなげていく。

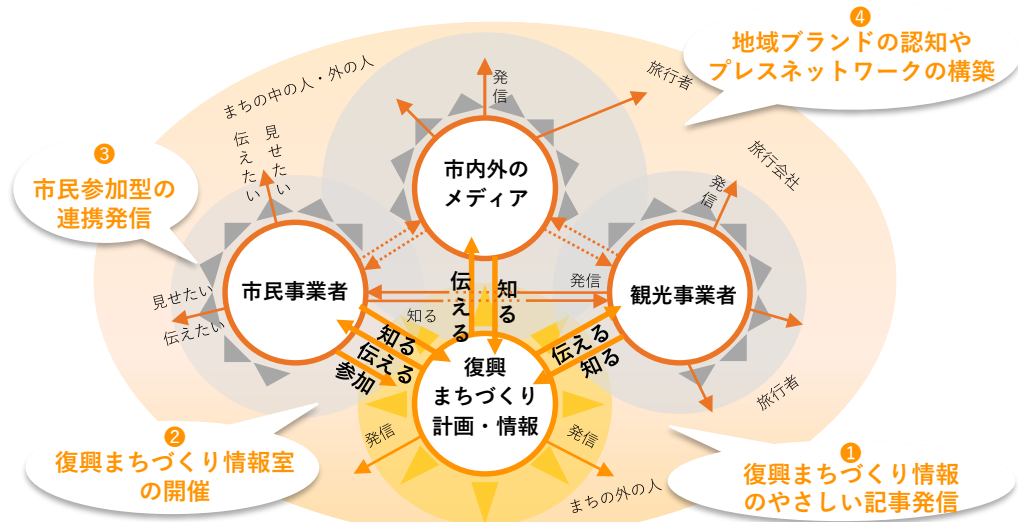
土地所有者の使い方は決まっていないが自ら保有しておきたいというニーズに対応して、所有権を持ったまま、暫定的に活用を委ねられる仕組み、人吉まちなかランドバンク(人吉LB)をつくる。行政と民間の運営団体が連携し、土地所有者と活用希望者をマッチングする。



情報発信

溢れる魅力をいかした復興まちづくり情報を市民と共有
 共感と愛着につないで情報の拡大と拡散を生む
 「まちの発信力を向上するアクション」

復興まちづくりの情報を行政から民間事業者や市民へ共有するため、情報発信の基盤づくりに取り組む。メディア、事業者、市民へ共有することで情報の循環、参加の機会を促し、まちの中の人、外の人へ情報が拡散される連携をつくる。



まちの内外に届く「復興まちづくり」の情報発信

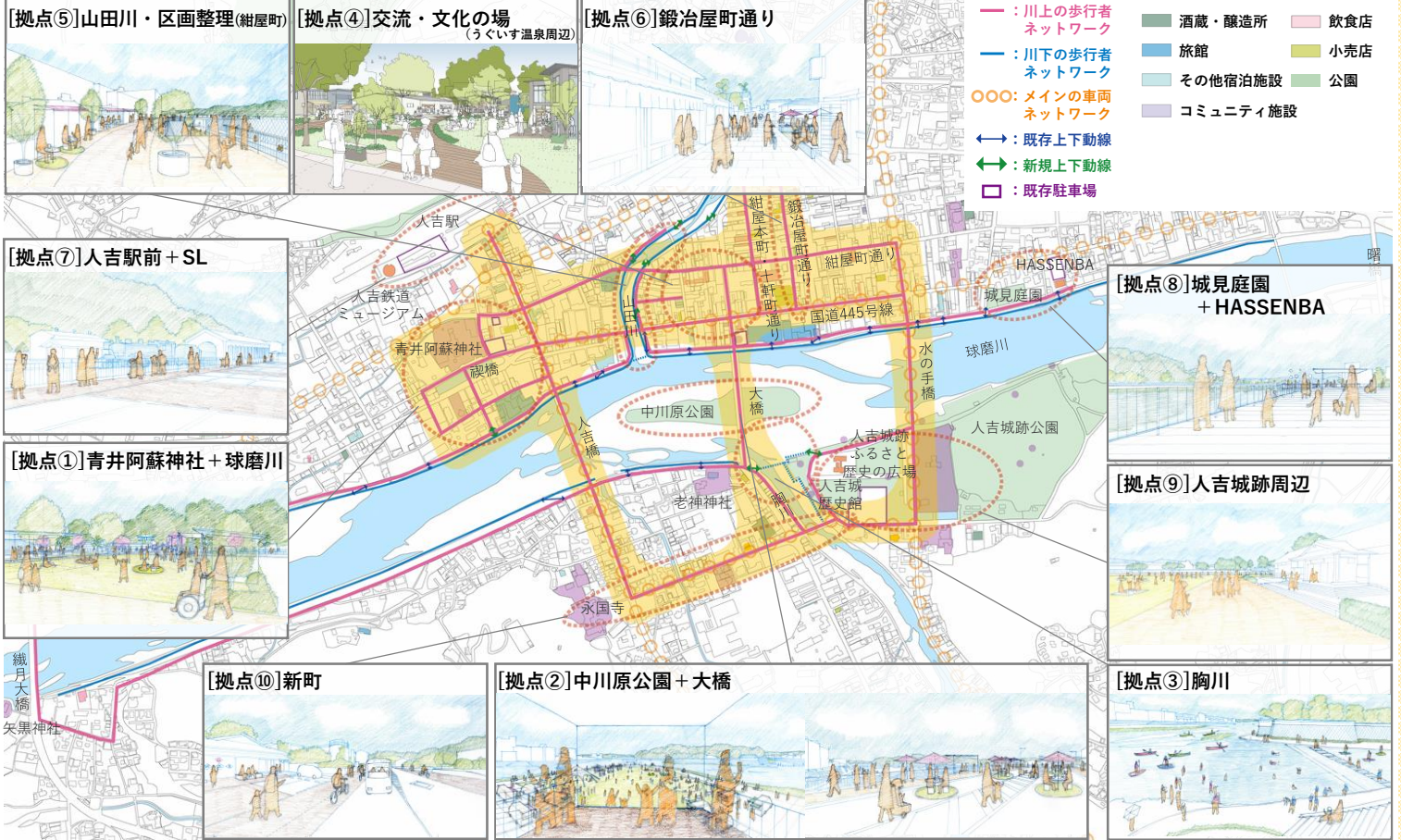
行政→民間事業者・市民へ共有 民間事業者・市民へ共有→参加と発信

10の拠点で生まれるシーンイメージ

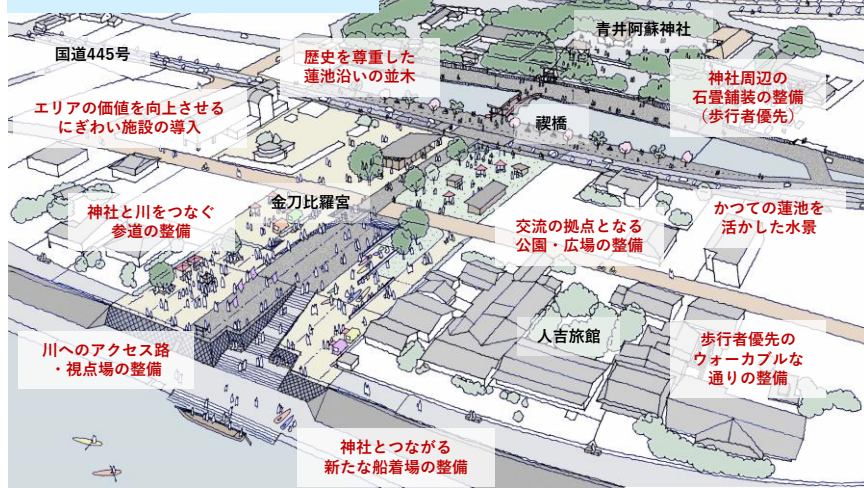
今回の復興まちづくりでは、清流球磨川の恵みやまちの資源を巡り体感できる10の拠点を定め、以下のような豊かなシーンを生み出していく。

【凡例】

- : 拠点
- : 主要な回遊動線
- : 川上の歩行者ネットワーク
- : 川下の歩行者ネットワーク
- : メインの車両ネットワーク
- ↔ : 既存上下動線
- ↔ : 新規上下動線
- : 既存駐車場
- : 歴史資源
- : 観光資源
- : 酒蔵・醸造所
- : 旅館
- : その他宿泊施設
- : コミュニティ施設
- : 公衆浴場
- : 駐車場
- : 飲食店
- : 小売店
- : 公園



①青井阿蘇神社 + 球磨川

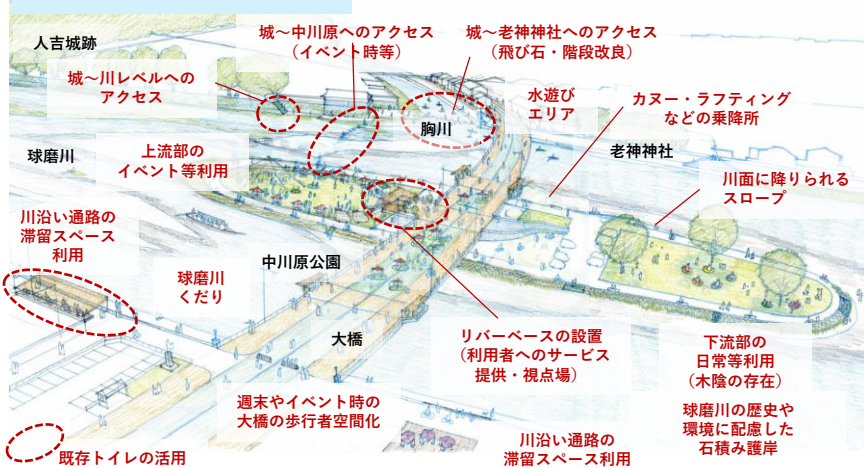


青井阿蘇神社は人吉球磨に残る数々の歴史的建造物の代表であり、人吉球磨地域住民の心の拠り所である。人吉球磨に点在する歴史的建造物や相良三十三観音、日本遺産をつなぐ拠点としての機能を強化する。

青井阿蘇神社周辺では、歴史性を活かした石畳を参道から球磨川まで連続させ、神社の森と球磨川の水をつないでいく。また、エリア内の道路は歩行者を優先とした回遊動線として高質化整備を行い、新たにできる広場や公園では公民連携事業による市民・来訪者の交流の拠点をつくる。

青井阿蘇神社周辺は観光の拠点、その周辺エリアは地元の生活空間としての性格を持つ。国道445号では通りの一貫性を持った基盤整備を行う。

②中川原公園 + 大橋



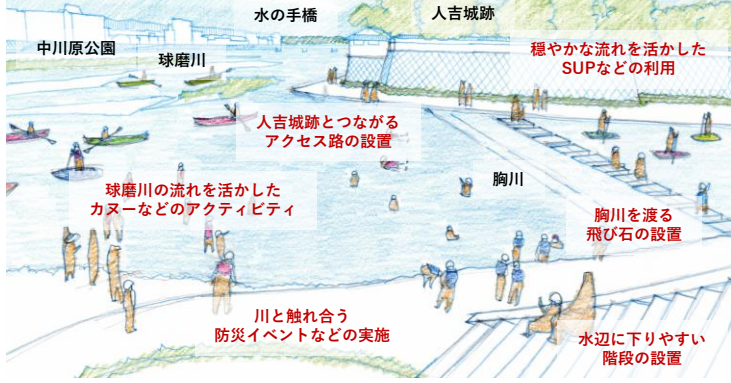
中川原公園は回遊のハブとして、公園や護岸整備とあわせて照明や滞留空間、樹木等の設置を行い、日常の憩いの場として球磨川を代表する水辺空間を演出する。公園利用者へ飲食やアクティビティ用具のレンタル、各種情報提供などのサービス提供を行うリバーベースを設けることで日常利用を促進する。

また、階段や飛び石を設けることで城跡や胸川とつながり、より川に近づきやすい環境をつくる。大橋については週末・イベント時に歩行者専用化することで、中川原公園と一体的に活用できるとともに、周辺との回遊をより強める。

球磨川の右岸沿い道路を沿道建物と連動した心地よい滞留空間に変え、川を対岸から見る見られるの関係をつくる。

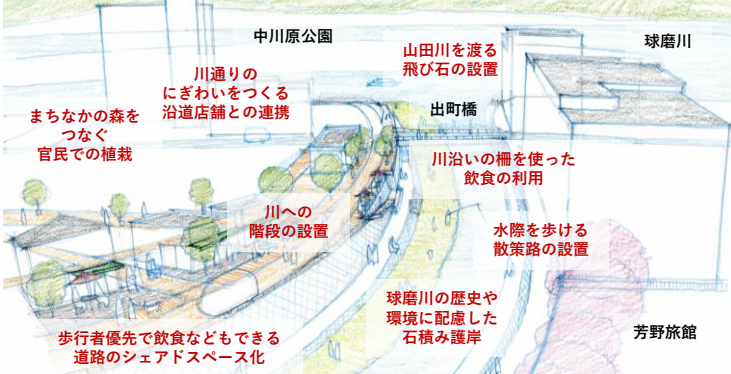
③胸川

胸川下流付近を「川のアクティビティの拠点」として川と触れ合い様々な水辺の活動ができる親水空間をつくる。飛び石や城跡からのアクセス路、階段等を設置して球磨川上下流のアクセス性向上と水辺の活動を促す。



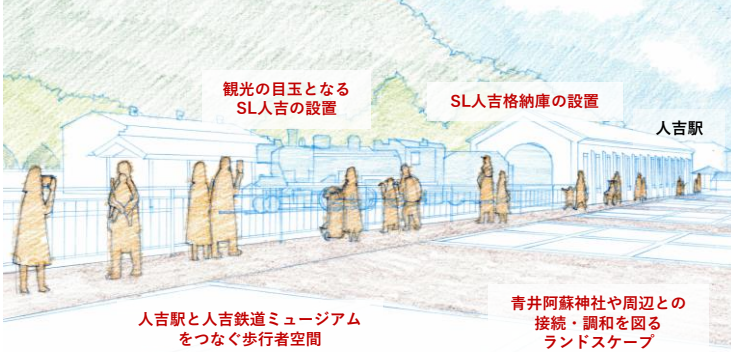
⑤山田川・区画整理(紺屋町)

山田川護岸整備に伴い、まちと水辺をつなぐ階段やスロープを新たに設け、川へのアクセス性を向上させる。川沿いは歩車共存のシェアスペースとすることで、歩きやすい回遊動線とする。



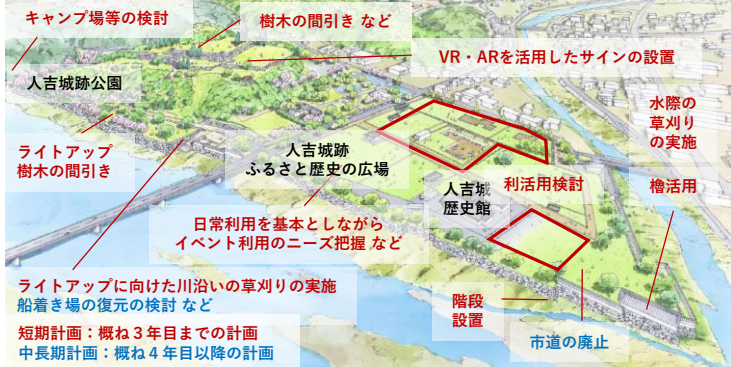
⑦人吉駅前+SL

SL人吉の動態展示を契機とし、くま川鉄道の利活用にも寄与し、沿線全体の活性化の起爆剤になるような取り組みを進める。将来的な肥薩線の復旧も見据え、駅・駅前広場・SL・人吉鉄道ミュージアム等を一体的に再編成する。



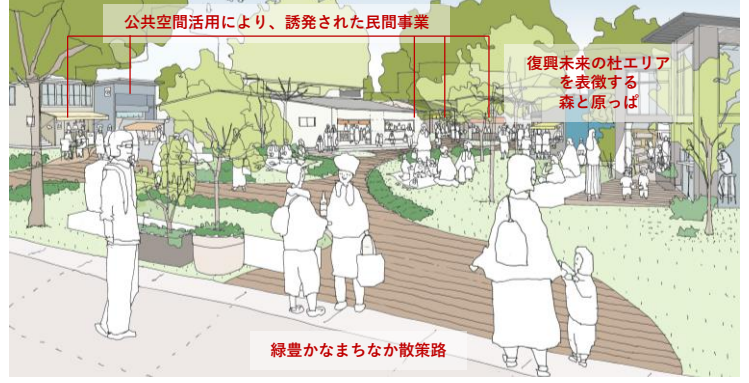
⑨人吉城跡周辺

歴史的雰囲気とより深く歴史文化を体感できる地域であるとともに、球磨川右岸と左岸をつなぎ市内への回遊性を高める地域となることを目指す。「人吉城歴史館」が結末点となり、観光客と市民をつなぐ役割を果たす。



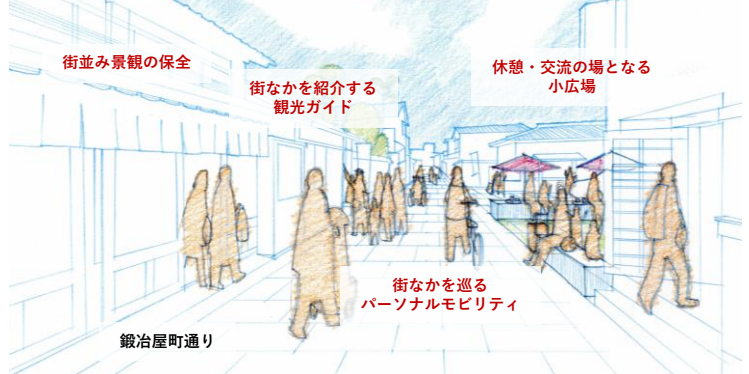
④交流・文化の場 (うぐいす温泉周辺)

水害リスクが低減されるまでの一定期間、中心市街地のエリア価値を損なわないよう、低未利用地を活用して、中心市街地の魅力と価値を維持、高める事業を公民連携で推進する。



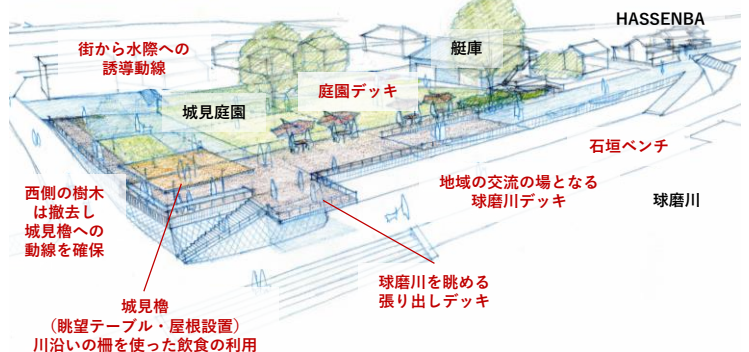
⑥鍛冶屋町通り

住民協定により守られてきた街並みを今後も維持し、道路は破損した石畳舗装の修復を行う。町人地の趣やなりわい、ウンスンカルタやお茶、味噌蔵などの文化的な営みを活かしたまちづくりを進める。



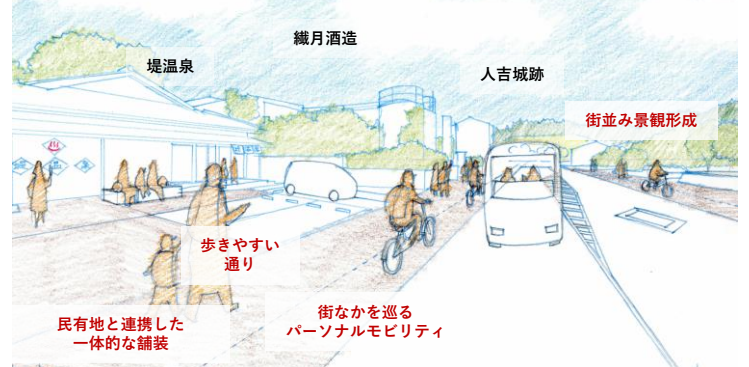
⑧城見庭園+HASSENBA

河川空間を活用し、HASSENBAともつながる場所として川沿いの管理用通路に対岸の人吉城跡や球磨川下流を眺めるデッキを設ける。庭園と連続するデッキは、地域活動や交流が生まれる場所となるように整備する。

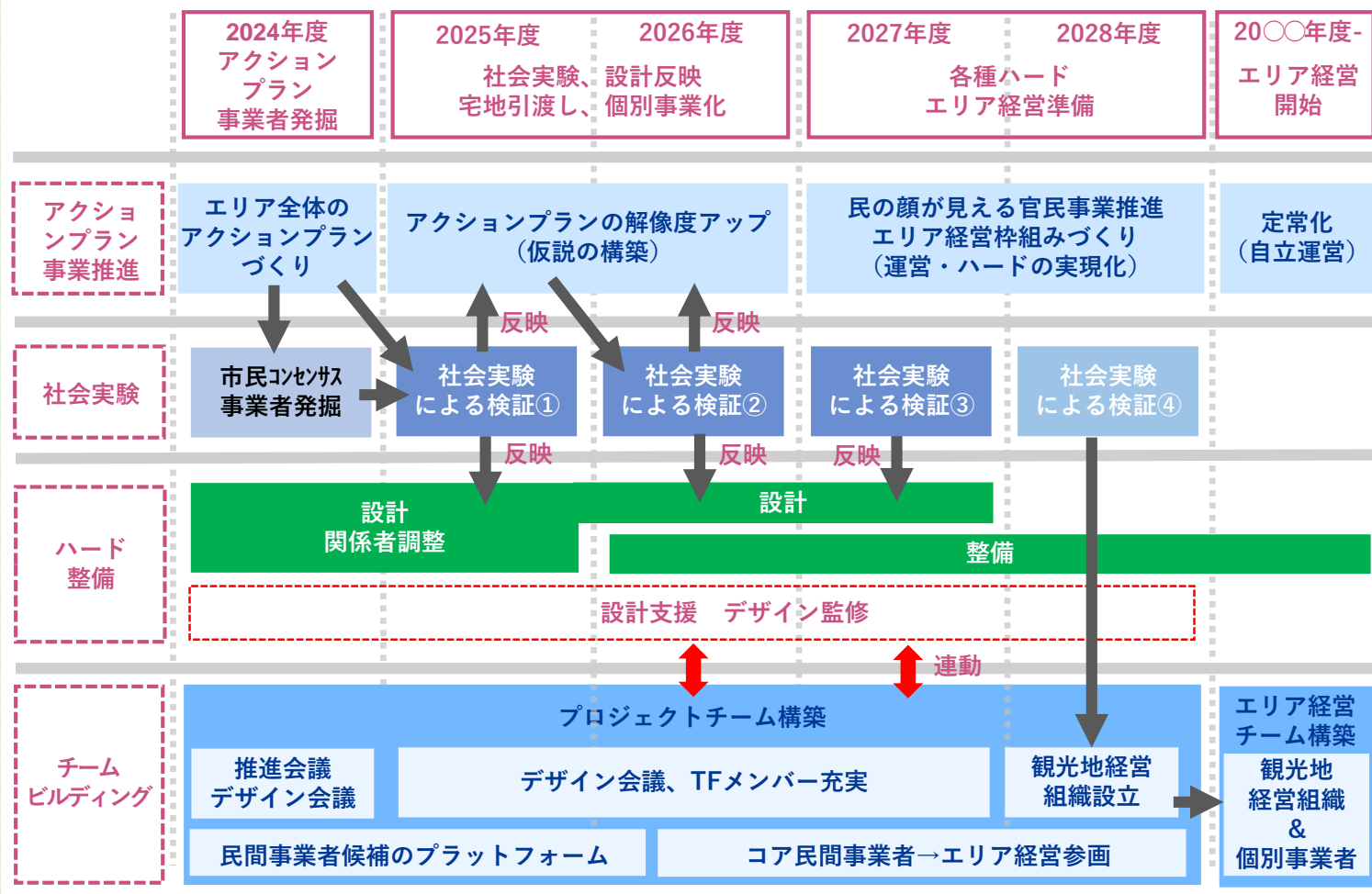


⑩新町

「球磨川左岸の観光まち歩き拠点」と位置づけ、観光客が移動しやすい通りを創出する。お城へのメインストリートである通りの歩行空間や照明を改良して、生活者も歩きやすく、まちあるきが楽しい通りとする。



復興まちづくりの全体スケジュールとして、まずは“ワクワクする将来の暮らしのアイデア集”としてのアクションプランを2024年度にとりまとめ、2025年度からその暮らしのイメージとハード整備後の運営主体・方法・財源等を想定しながら社会実験を進め、民間投資・活動と連動したハード整備と事業化を目指していく。



持続する観光地経営：観光地経営に継続的に取り組んでいくための「財源」と「担い手」が必要

これからの観光においては、市民の生活満足度向上と観光地魅力向上の両輪を進めことが求められる。それには、地域住民・関係人口、観光客、働き手のそれぞれの共感や満足度を高めるため、以下の3つの要素に取り組みたい。主体としては、関係する既存組織の役割や対象エリア、各々の経営資源を確認しつつ、必要に応じて新たな財源や担い手の検討を行う。

観光地経営の3つの要素

地域住民
関係人口
の共感・参画



地域観光戦略
づくり

- ・ 戦略立案、事業推進
- ・ エリアマーケティング
- ・ 対観光客情報発信
- ・ コンテンツ企画

観光客
の満足



ローカル
ディベロッパー

- ・ 不動産事業（空物件活用）
- ・ 公共空間運営（河川道路公園）
- ・ 事業者誘致
- ・ 駐車場運営

働き手
の満足



地域事業環境
づくり

- ・ 地域事業者支援
- ・ 働く魅力づくり
- ・ 地域循環の促進